知恵の樹
No. 125 2007. 12. 26
町田の図書館活動をすすめる会
事務局:町田市森野 3-1-12　増山方

# 「貸出し」によって身近になった図書館

山口　洋

**図**書館は書物を収蔵し、保存するだけの場所であろうか？古代の図書館や中世、近世の図書館は一部の限られた利用しかなかったのであるから、それで良かったかもしれない。しかし、近代市民社会が成立し識字率が向上し、多くの市民が書物を読むようになると、図書館は利用者に読書の機会を広く提供する場所へと変わった。現在の図書館では、読書提供の方法として、公共図書館、学校図書館、大学図書館でも「貸出し」は最も効果的な方法として実践されている。「貸出し」の有効性については、日本図書館協会から 1963 年（昭和 38 年）に刊行された『中小都市における公共図書館の運営』（通称『中小レポート』）で指摘され、1970 年（昭和 45 年）に刊行された『市民の図書館』では最重要課題としている。その実践の結果が今日の開かれた図書館であり、気軽に立ち寄れるような市民生活の一部となった図書館である。その「貸出し」の中心にあるのは本ではないだろうか。

**近**頃は、電子図書館構想やデジタル資料の提供も図書館サービスの一環に含めるべきであるという考え方が、よく示されるようになった。その様なサービスを行う図書館も増えた。利用者の求める情報を草の根を分けても探し出して提供するのが図書館であるから、デジタルメディアでしか提供できない資料もあるだろうし、それを提供することに異存はない。しかし新しいメディアが登場しても、本の持つ魅力は全く失われることはないと思う。本は開けばすぐ読めるし、読むのをやめようとすれば閉じるだけでよい。鞄につっこんでも壊れにくく、文庫・新書サイズなら持ち運びも簡便である。また素材の紙は、記録メディアとして二千年以上の歴史を持つ。程良い耐久性、適度な値段が親しまれる所以であろう。残念ながらデジタルメディアでは追いつけない。この簡便性が「貸出し」にはうってつけであり、「貸出し」によって本の持つ情報はいつでも好きなときにすぐに利用できるようになる。

**本**の欠点として指摘されるのは、その情報がタイムリーではないという点であり、この点においてデジタルメディア（特にインターネットなどの情報提供）の方が優れているという指摘もなされる。これは印刷や製本という、製作に一定に手間がかかる本の持つ宿命である。しかし全ての情報はタイムリーでなければいけないのだろうか？そもそも利用者が図書館に求める情報とはその様なものばかりであろうか？

**情**報には、常に最新のものを必要とする場合もあるし、過去の記録もまた情報である。利用者は、最新の情報を求める場合もれば、過去の記録を確認したり調べたりする場合もあるだろう。現状では、全ての情報がデジタルメディア化されているわけではないし、過去の記録は本などの紙媒体によって提供される情報の方が圧倒的に多いから、今後とも本が図書館から消える可能性はあり得ない。またデジタルメディアの場合は、情報を取り出すのにパソコンなどの機器が必要であるし、数年で更新される OS や機器の買い換えにはそれなりの出費を伴う。経済性からみても、デジタルメディアが万能であるとは思えない。今

後の技術革新によってさらなる記録媒体としてのニューメディアが登場するだろうし、図書館にはそれも図書館資料として取り込んでいく必要性があるだろう。しかし図書館資料の基本をなすのは既に多くの情報を蓄えている本であり、その本を有効に利用するには積極的な「貸出し」が重要であると思う。

**公**共図書館における「貸出し」重視の姿勢に対しては、若干ではあるが批判意見もある。税金で行われる公共図書館のサービスにおいては、ビジネス支援やより専門的な調査支援などを優先すべきだという考え方である。これらのサービスを否定するつもりは無いが、私は「貸出し」にこだわりたい。つまり利用者は、図書館に調査のためだけに行ってはいないからである。図書館で調べれば済むこともあるかもしれないが、数冊の本を借りだして家でゆっくり思考をめぐらす場合もある。それからちょっとした読書の楽しみのために本を借りる場合もある。通勤電車の中で図書館のラベルのついた本を読んでいる人を見かけることは珍しいことではない。さらに「貸出し」を繰り返すうちに、図書館に親近感を持ち、生活の一部としてきた利用者も多いはずである。図書館が身近になれば、「貸出し」以外のレファレンスなどの情報サービス(それこそビジネス支援も)を受ける機会も増えるだろう。「貸出し」によって、利用者は好きな時間に好きなだけ手軽に本を読める。これこそ市民社会の獲得した現代の図書館ではないか。その根幹にある「貸出し」こそ今後とも最重要のサービスではないだろうか。

**「貸**出し」を阻むものあるとすれば、それは資料費の削減であろう。自治体の財政難から公共図書館の資料費が伸び悩み、削減される方向にある。しかし、資料費削減の結果はどの様な状況を招くのか？少ない資料費では、十分な本を書架に並べることはできない。求めればキリは無いが、ある一定以上の蔵書がなければ、利用者の要求には応えられないし、「貸出し」も十分には行えない。代わり映えのしない書架に新刊書も十分に補充されないような図書館では、やがて利用者に見放され、図書館そのものが財政の「不良債権」と化してしまう。人材を費やし、費用を費やして作り上げてきた図書館をよりよいものにするために、優れた人材と一定以上の費用を継続投入することは不可欠である。公共図書館でも学校図書館でも大学図書館でもこれは同じことである。目先の新しいサービスやマスコミ受けするような新企画もよいが、それを実りあるものとするためには、基本である「貸出し」とそれを支える十分な「蔵書」と「資料費」が必要であり、それを運用する司書が必要であることを忘れてはいけない。

**町**田市立図書館は、その点では「貸出し」を重視しており、私は利用者として一定の満足を得ている。調べ物も案外事足りる。しかし資料費についてみれば十分とは言えない。市民一人あたりに換算すると、東京都内の公共図書館中で最下位(200 円以下)にあるという。それでも利用者として一定の満足があるのは、ひとえに現場の職員の努力によるものであろう。装備などの作業は外部業者に委託する図書館が多い中で、町田市立図書館では選書から装備まで自館内において実施しているという。(詳しくは、高松昌司「大規模市立図書館における選書の実際」『図書館雑誌』2007-6 所収参照) その結果、本の選書から排架までの時間を短縮しえたことも多いに評価できるが、本を知り利用者の立場に立った職員が装備をしている点は利用者として最も評価したい点である。先日発見したその一例を挙げれば、町田市立図書館(中央館)所蔵の児童書『いたずら きかんしゃ ちゅうちゅう』という一書を見ていただきたい。昔から読まれてきた児童書であるが、この本の表紙見返しには、お話の舞台となる町の様子がカラーで描かれている。子どもはその絵の中の線路をたどりながら、お話を回想しながら自分の世界に浸って遊んでいる。つまりこの本では、見返しの絵も大切なのである。ところで多くの公共図書館では、本のカバーをつけて排架しているので見返しはカバーによって隠されたまま貼り付けられてしまう。町田市立図書館所蔵のこの本は、おもて表紙の見返し部分のみではあるが、カバーの折り返しを切り取って絵を隠さないようにしてから、カバーを貼り付けているのである。これは本がどの様に読まれるのかを理解している職員の仕事であると思う。機械的にラベルを貼って背文字を隠したり、絵があるのにその上に貼り付けてしまう図書館が多い中で、わずかな配慮ではあるが本が読まれる様子を想像して丁寧に装備している職員の存在は、利用者として頼もしい。本を知り利用者を知

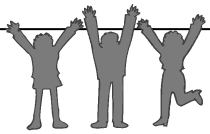
っている職員である。その様な職員が利用者を知るのは、カウンターの「貸出し」業務を通して知るのではないだろうか。この様な職員がいる図書館ならば、利用者としては心強い。しかし、職員の努力にも限界がある。基本である資料費はこれ以上削減してはならない。むしろ増やしてより積極的な「貸出し」へ繋げて欲しい。

**ま**た「貸出し」を通して図書館が身近に感じられるようになるのは、子ども達も同じではないだろうか。子ども達が本を自由に借り出して本に親しむ習慣を獲得すれば、彼らの将来において図書館は寄り身近なもの、生活の中における自然な存在になるだろう。読書活動推進を掲げた文部科学省は、2007 年 4 月にパンフレットを小学校父兄向けに配布したがそれによれば、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（閣議決定）」として①家庭、地域、学校を通じた子どもが読書に親しむ機会の提供。②図書資料の整備などの諸条件の整備・充実。③学校、図書館などの関係機関、民間団体等が連携・協力した取組の推進。④社会的機運醸成のための普及・啓発の4点を掲げている。

**し**かし現実は、学校図書館では蔵書が十分ではなく、公共図書館は子ども達の身近に十分な数が設置されているとは言えない。町田における図書館活動の歴史を顧みると、子ども達が本に触れ合う機会を作ろうとした市民による文庫活動が大きな力となっている。公共図書館が地域に根ざした図書館であるならば、公共図書館の一般論として重視される社会人への情報サービスの他に、その地域の歴史的な文脈の中から生まれてきた要求も大切にしていく必要がある。それ故に、公共図書館として児童サービスや学校教育との連携を保つことは町田において大切なのではないだろうか。これも「貸出し」を基軸に進めていけるのではないかと思う。

（やまぐちひろし／中町在住・新会員）

## *自治労町田市図書館嘱託員労働組合誕生！*
## *― 結成大会開かれる ―*



去る11月 29 日（木）19 時より中央図書館6Fホールにおいて、図書館で働く嘱託員の労働組合結成大会が、市職労や自治労東京都本部の役員等が来賓として参列し先輩組合員が見守る中、厳かに感動的に行われました。当会も招待され代表が出席、その模様をお知らせします。

**開**会宣言、議長選出のあと、嘱託職員連絡会代表の野角さん(中央図書館)より「嘱託として働いて7年、その間何人もの仲間が体をこわしてやめていった。そんな中で中央館は2年後、地域館は3年後、嘱託員を打ち切るかもしれないという話が持ち上がって来た。そこで考えた。一人の力はとても小さい。自分たちのことは自分で守らねばという吉岡主査の声に後押しされて動き出した。集まってくださった方たちに感謝している。これからも自分たちのことと思って考えて欲しい」という発会に寄せる思いが語られました。

労組役員の来賓からは、「地方自治法 244 条により民間業者に運営を任せることも可能になり、きわめて脅威的状況になる中、組合結成で、一方的解雇の雇い止めは出来なくなる。」「既成の組合に加入と、結成するのとでは違い、図書館ユニオンを皆さんの結力で誕生させたことはすごいことである。皆さんの前には自由な真っ白なパレットがある、基本的な制約もあるが何でもできる。個々人ではなく、これからは、一人ひとりの問題を、一人ひとりの対応ではなく組合との交渉によって決めていく。先輩に力を借りながら、5周年、10周年にジャンプできるよう一致団結して頑張りましょう！」という熱いメッセージが送られました。

次に原澤さん（中央図書館）から力強い経過報告がなされました。（その原文をご紹介します）

「－前文略―　今年の春先に、私たち嘱託職員の今後について危機感を抱いた数人で、ごく内々に話し合いの場がもたれたというのが始まりでした。

私たちは、図書館司書という職務に対して高い理想と意欲を持って取り組んでおりますし、今後も長くこの仕事を続けていきたいと考えています。また、できる事ならこの仕事で生計を立てていきたいと思う者も少なくありません。しかし、図書館は今、委託の波が押し寄せ、私たちを取り巻く状況は、以前と比べて大きく変化してきています。労働条件も不安定な上、

雇用そのものに対する不安も常について回るような現状では、何か有効な対策を考えない限り、私たちの願いは叶わぬものに終わってしまいます。それならば、私たちの声を届けてくれる団体や機関のようなものが必要ではないかと、そう考えた者たちの間で、組合設立に向けての最初の小さな一歩が踏み出されました。

そこで、今年の７月 12 日に第１回の嘱託職員全体説明会が行われました。この時点ではとにかく自分たちで何かやろう、動き出そうといった趣旨の呼びかけがなされました。間をおかずに、一週間後の 19 日には、町田市職労の方を講師としてお招きした、第１回の勉強会が開催されました。勉強会はその後も続き、8/9, 9/27 を含めた計３回程の日程の中で、組合とはどのようなものなのか、町田市内にある他の嘱託職員の組合はどのように活動されているのか、実際に設立するとすればどのような手続きを踏むのかなど、様々な方にお話を伺いました。組合を設立することについて、最初は右も左もわからない発起人たちでしたが、自治労東京都本部・町田市職労・町田市役所ユニオンをはじめ、本当に沢山の方のご支援やご協力をいただいて準備がなされ、今日無事にこの結成大会を迎えることができました。

私たちはこれまで、嘱託職員を取り巻く状況についてひとりで考え悩むことはあっても、それを声に出して主張する場はありませんでした。しかし、自分たちの問題は、他の誰かに頼るのではなく、自分たちの力で解決し、可能性や権利を獲得していかなければなりません。今回の組合の結成で、険しいものかもしれませんがその道は開かれたと感じています。さらに今後の活動が充実したものになるよう、ひとつでも多く実を結ぶよう、一生懸命に取り組んでいきたいと思います」。

**議**事は進行され、自治労町田市図書館嘱託員労働組合規約・自治労加盟・要求書（市教育長宛）・予算 の（案）も承認され、役員選出には、準備段階から頑張った人たち(執行委員長：野角裕美子、副執行委員長：関口奈伯、書記：院丸優子・斎川美江、執行委員：稲垣智子・梅谷信子・市川昌幸・和田タツ子・安藤陽子、会計：浦野充子・原澤朋子、監査：五明直子、特別執行委員：荒井陽一・吉岡一憲・大野惠市)が選ばれ、団結頑張ろう！の掛け声で大会は終了し、図書館嘱託55名の内45名加入の組合が誕生しました。

町田市でも一部委託案が市長から出されていますが、図書館は、嘱託の増員で委託を免れるという苦肉の策を選択したようです。嘱託は若い能力のある方たちですが、その力を存分に発揮できない環境にあることや、身分保障が乏しく不安定であるなどの悪条件から立ち上がろうと、忙しい中1 年がかりで組合結成にこぎつけたことに感一入でした。そこに、この会結成にサポートした自治労の組合員がたくさん駈けつけていたのも感激でした。生き生きと楽しく働ける職場でなければ、図書館の発展は望めません。市民も応援しています。頑張って！ （増山）

レポート　山本宣親先生最終講義

## 「公共図書館のこれからと課題」

### 「5 つの指定席」― 図書館レファレンスを利用して ―

和山郷美

先日、「小学生の時、お母さんと一緒に見た懐かしいあの映画をもう一度見たい！」という友人の話を聞き、さっそく町田中央図書館のレファレンスに問い合わせました。記憶にある場面を話しただけですが、職員は熱心に耳を傾けて親切に応対してくださりそれだけで感激でした。そして、映画の題名は「赤い風船」、町田にはないけれど渋谷本町図書館にある、ということを教えてくれ友人は大喜びでした。

渋谷の図書館に連絡を取ると、館長さんから「私も映画好きですから皆さんの気持ちが良く分かります。どうぞ観にいらしてください」という返事を頂き、仲間 5 人で伺う日を約束して、その日皆で出かけました。

カウンターで利用券を作り、用意してくださった視聴覚室のドアを開けると、そこに 5 つの椅子が並んでありました。

映画は、少年と風船が仲良しになり、ラストに少年の「バルーン！」のひと言で町中の風船が集まって少年を乗せて大空に飛んでいく、という内容でした。私たちの思いが、図書館を通じて一つの大きな風船にふくらんだようでした。

図書館の方々の連携で、私たちの思いを叶えてくださった、あの視聴覚室に並んでいた「5つの指定席」が、今でも鮮やかに映画の1場面のように残っています。

心に刻まれた映画の場面が何十年もたち蘇ってくる、その時間と場所を提供してくださった図書館の存在の重要性を改めて知った思いです。ありがとうございました。（わやま さとみ・森野在住）

鈴木　史穂

11 月 26 日(月)静岡文化芸術大学に於いて山本宣親先生＊の最終講義(テーマ表記)が行われ、私を含む現役図書館職員(司書)3人も聴講させていただいた。

はじめに、「これが最後の講義になる」との先生の言葉に学生たちがどよめいた。次の週が授業の最終回なのだが、その回は学生の研究発表が中心になり、講義としてはその日が最後であった。先生は終始、静かな熱のこもった口調で学生ひとり一人に語りかけるように話され、教室は、先生の言葉を一言も聞き漏らすまいと聞き入る学生の熱気につつまれていた。

先生は「図書館は太鼓、バチをあてる人がいなければ音は出ない。市民からの声が上がらなければ、図書館がどんなにがんばっても限界がある。行政と市民の協働が必要なのです」と話され、「努力をして図書館計画を作り、議会が了承しても実行不可能なことがたくさんある。後押しする市民の力が弱いと実現しません」という実感のこもったお話には説得力があった。

「図書館に関する要求を若い人が、これからどれだけしていくかが重要」「広い視野で見たとき、”図書館はこうなる”ということは言えない。それを決めるのは図書館職員と利用者の質」と厳しいお話をされながらも、「少数の出発であっても、多数となり、世論となり、法律となる。図書館に司書を置かなければならないという法律へ」という、ひとり一人の力の大切さと意義を教えて下さった。

「図書館だけでは成長しない。図書館を図書館として利用する人がどれだけいるかが、成長させる力となる」と、繰り返し利用者が図書館のために行動することの重要性を説き、「求める人が大勢いれば、図書館はその求めに応えた場となる」ということを噛み砕いて説明された。

「自分が自分の図書館に貢献できたと実感してほしい、喜びに感じてほしい」という先生の言葉は、「本を読み、生き生きとした若者のいる国は栄えると思っている」という願いにも似たメッセージとともに、学生の胸に届いたことだろう。山本先生の図書館学の講義は、図書館で働く司書になるためだけの教育ではなく、図書館を育てる市民になるための教育でもあったのだと気づかされた。　(公立図書館司書)

＊元富士市図書館長、『図書館づくり奮戦記』(日外アソシエーツ)、『図書館森時代』(編著/日本社会研究所刊)、静岡文化芸術大学非常勤講師。97年5月末当会が富士市立図書館を見学したのがご縁で、その後も町田と懇意にして頂いている。

町田の学校図書館を考える会　〈報告〉

子どもの本　連続講座　07-③

## 語りで聴く『たけくらべ』

講師：伊東陽子さん（多摩市中学校司書）

## ～生きた学校図書館をめざして～

*2007年12月8日（土）*
*日本子どもの本研究会・*
*親子読書地域文庫全国連絡会　共催*
*貸し会議室「内海」（千代田区）にて*

暮れも押し詰まった土曜日、毎年恒例の「学校図書館のつどい」に参加した。午前中の講演は少々遅れての参加になってしまったが、午前･午後を聞いての感想を簡単にまとめたい。

### 「子どもを育む読書　知の創造へ」

***秋田喜代美氏***
*（東京大学大学院研究科・教育学部教授）*

お話は、多様な読書の仕掛けということから、読書塾が都内にできたこと（塾で読書指南？）や、多くの自治体で行われつつあるブックスタートに先ず触れた。ブックスタートについては、「配布ではなく心を込めた手渡し」という言葉に日本での課題が集約される。考えてみれば今20～30代の若い父母たちの多くは、学校図書館がまったく機能していない不幸な時代に小中学生時代を過ごしている。本の楽しさや絵本の豊かさに触れずに子ども時代を過ごした人が、他の年代層よりも多いのではないだろうか。そう考えると、まずは親たちに本をしっかり手渡し、親たちに本好きになってもらうことが要かと思う。読書が与えるものは学力だけではなく、心の豊かさ、どんな辛さにも負けない柔軟な精神であることを再確認。

この数日前にＰＩＳＡの結果が報告され、新聞を賑わせていたこともあり、話はＰＩＳＡの問題に大きく割かれた。ＰＩＳＡでの日本の結果は惨憺たるもので、またしても不毛な学力論争が再燃するきっかけになりそうだが、秋田氏が、あまり触れられないけれど報告しておかなければならないこととして示したのが「書店や図書館へ行くことが楽しい」と「本の内容について話をするのが好き」という質問で、日本が圧倒的に高い比率だったことだ。読書をする割合が低いことに反比例して、この結果はどう解釈すればいいのだろうか。

またＰＩＳＡショックですぐに現れてくるのが「ＰＩＳＡ型問題集」というところが、いかにも日本らしい。問題解決を単なるスキルの習得に貶めてしまう危うさを懸念する。フィンランドの教育改革の仕掛け人とのインタビュー『オッリペッカ・ヘイノネン―「学力世界一」がもたらすもの』（日本放送出版協会）を読めば、その根底にある教育目標の高さと国を挙げての教育にかける情熱がいやがおうでも伝わってくるというのに･･･。フィンランドが第一に掲げているのが教育格差の是正だった事を考えれば、学校間格差や地域間格差、さらには個々の生徒の学力格差の非常に高い日本で、今何が一番の問題であるかは明白ではないだろうか。ＰＩＳＡの結果に右往左往してばかりいないで、目の前にある子どもたちの問題を虚心で直視してほしいと強く思う。

さて話は目下中高生を中心に猛威を振るっている？ケータイ小説にも及んだ。学校図書館関係者の集まりでは、寄ると触るとこれが話題になる。その稚拙さや露骨な性描写に目くじら立ててもはじまらない、やがては淘汰されていくのではないかとは私見。秋田氏はＩＴを日常的に使いこなす中高生を読書へと取り組むにはオンラインサービスの活用が欠かせないという。これには私も大賛成で、興味のある本に関連した書籍を個別に紹介するオンラインシステムを真似した個別のサービスは一考に価する。他に読書メディアに関連した取り組みとして、杉並区の「本の帯賞」などにも言及した。身近な人がすすめる、手渡しの感覚を大切にしたい。

秋田氏は、本の魅力はなんといっても大勢に染まらない「マイノリティー」の主張でも、1冊の書物として堂々と発表し一つの世界をつくることができる点、また学校教育では取り上げられない多様な問題や価値観についても、本を介して提供・紹介できる点にあるという。ここにこそ学校図書館の意義があるのではなかろうか。多角的な視点を持つことは、かならずやその子の将来を魅力あるものにしていくはずだ。教科書問題などなんのその、日頃から様々な本や主張に触れ、自覚的な学びを作り上げていれば、へぼな教科書でも！？反面教師となろう。

さてそこで学校図書館だが、読書環境によって子どもの読書は大きく変わると秋田氏は述べる。その通り。教師の仕事は「よい本を紹介すること」だと言い切るが、まず読む習慣と力をしっかり作り上げた後は ― 咀嚼する丈夫な歯と吸収する胃袋を備えてさえいれば、いつだって学ぶことはできる。そのための最良の料理を提供すること、しかも魅力的に盛って、思わず飛びつきたくなるように･･･これが学校図書館と子どもの本に関わる

人たちに求められていることであり、しなければならないことだろう。

デューイや大村はまの言葉を引用し、学びにおける読書の大切さを熱心にお話しされたのだが、ことほどさように本を欠かした教育などありえないにもかかわらず、どうして未だに日本の学校現場では本を使わずに教えようと躍起になっているのだろうとつくづく不思議に思う。学校教育や子どもたちの生活の中心に図書館をおくことが当たり前の社会が、一刻も早く実現することを願わずにはいられない。

## 「袖ヶ浦市における学校図書館の活動」

**中村伸子氏**

（袖ヶ浦市教育委員会学校図書館支援センター）

午後は調べ学習への積極的な取り組みで有名な袖ヶ浦市から、長く学校図書館で読書指導員をつとめ、現在は学校図書館支援センターに勤めておられる中村氏による報告だった。

袖ヶ浦市は平成３年度から蔵書の見直しとコンピュータ管理システムの導入を推し進めた。パソコン入力の手間を考えてのこともあったのだろうが、先ずは古い蔵書をふるいにかけ、3000 冊にまで思い切って減じたそうだ。その上でパソコンに入力、またその後毎年 100 万円ずつの購入費をつけ、蔵書の刷新を図った。実はこのパソコン化が幸いして、教員へのアンケート調査で図書館に「専任の人がほしい」との要求が強くなり、読書指導員（学校司書）を置かざるを得なくなった経緯があるのだという。そのため平成７年度から段階的に「人」を入れ、更にその２年後からは学校・公共図書館・博物館などを巡回する物流が始まった。パソコン→人→物流という整備は、いずれも玉突きのように必要に迫られ行われている。人を入れるとどうしても物流がないと差しさわりが生じ、その強い要求に応えるために業者に週 1 回市内を回ってもらう形になった。全校 13 校というコンパクトな自治体である事も幸いしたのだろうが、それにしても早い段階で学校図書館の重要性を認識していたからこその改革だろう。またすべての学校図書館にコピー機を設置していることも、羨ましい限りだ。どんなに資料が充実しても、子どもたちの調べ学習ではどうしても同一資料が取り合いになってしまう。コピーができれば、と何度感じたことだろう。もちろんそれをそのまま写すなどということはされていない。

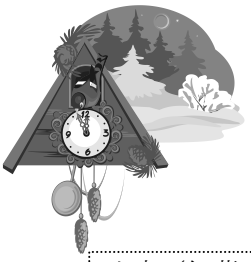
こうして環境がほぼ理想的な形で準備されて、平成 12 年度から市独自の「図書館を使った調べる学習賞コンクール」が始まるのだ。当初はなかなか思うような結果にはならなかったというが、しかし数年を経た今、調べる学習の質の向上には目覚しいものがあり、図書館の学校による「調べ学習コンクール」でも常連入賞の実績を誇っている。これは図書館の環境整備はむろんだが、この間の読書指導員による自主的な勉強の結果なのではないだろうか。また自治体としても、文部省（当時）のモデル地域事業の指定などを積極的に活用し、図書館整備に取り組んできたことも大きいと思う。その意識さえあれば、なにもすべての費用を自治体が負担せずとも、いくらでも整備していくことはできるのに･･･とわが自治体を振り返って臍をかむ思いだ。

平成 17 年度からは教育センター内に学校図書館支援センターが設置され、中村氏はそちらの専属となった。また文科省の指定を受けスタッフの増員も図られるなど、とんとん拍子で整備が進んでいる。

この支援センターでは学校図書館の物的支援として、図書資料の貸し出しなどのほか、博物館の資料（ex「戦時中の暮らし」）をパックにして貸し出すなどの事業も行っている。これは大変おもしろい試みだと感心した。町田でも市立博物館などに昔の民具などが保存されており、これらを授業に活用できたらどんなにかすてきだろうか。さらにこうした物的支援のみならず、読書指導員のメンタル面でのケアなども業務に含まれているという。そして様々なデータの集約や分析、調査などなど、幅広い業務内容だ。これらは長く学校図書館に携わり、学校教育の現場をつぶさに経験してきた中村氏の豊かな発想に負うところが大なのだろう。

こうした実績があってはじめて、今年度「読書教育サミット in　そでがうら」の成功があったのだとうなずける。準備がさぞかし大変だったろうと思うのだが、これだけの大きな企画を滞りなく進められたことで、さらにはずみがついたのではないだろうか。事実今年度新たに文科省による「読む・調べる習慣にむけた実践研究事業“子ども読書の街づくり”」の指定を受け、広く高校生や地域をも巻き込んだ読書活動の展開を計画しているという。これからの袖ヶ浦市学校図書館のますますの発展を見守りつつ、少しでも町田市に取り入れることができるよう、努めていきたいと思いを新たにする１日であった。

（会員：水越規容子/中学図書指導員）



# ひろば

＜11月例会報告＞
28 日(水) 16:30～作業
18:00～20:30例会
於・中央図書館中集会室

出席／伊藤 川野 久保 島尻 手嶋
前島 増山 丸岡 山口洋（吉岡）

●12 月会報原稿について
・嘱託職員組合結成大会の模様(P3)
・語りで聞く「たけくらべ」の報告を(P5)
・図書館関連の記事を、山口氏に(P1)
●ワイワイガヤガヤ
・図書館協議会が11月27日にあったが、まだ今期の議題は決まっていない。
・文学館祭りが 10 月 28 日に行われ、550 名参加。地域とかかわりのある祭りでよかった。
・八王子市との図書館相互利用協定は、八王子市役所で 10 月 28 日調印が行われた。
・臨時教育委員会を傍聴したが、議長の一方的な進め方に疑問が残った。
・児童書の新刊本紹介の講座日程について・・・3月 25 日(火)か 18 日(火)を希望、講師の広瀬さんに打診する。会場予約は組合が取る。
**(★⇒3月18日10:30～12:30 中央館6F ホールで、広瀬恒子氏を講師に開催決定！)**
・冊子「としょかん」の田井さんの記事について、話し合う。皆さん是非「としょかん」を読みましょう。
・見学したい図書館はどこ？候補に上がっていた千代田図書館は行きたいという人気がなくなった。
●「新 図書館の発見」(NHK ブックス)を読んで―それぞれの感想は最後にまとめてご紹介する―
・町田の場合本の選定はどのようにしているかという話題から選定室を手嶋さんの案内で見学する。
・次回は、山口さんより根本彰氏の「情報基盤としての図書館」の意見をまとめて、前川レポートとの比較をする。
●1 月～3 月の例会・・・第4水曜日18時から

**お知らせ**

★「水島朝穂氏、憲法をおおいに語る」 1 27(日)18:30～20:30／市民フォーラム3Fホール／1,000 円(前売 700 円)／九条・まちだ☎&Fax042-726-5326(昼)

第６回 **文学館(主催)で楽しむ**

おとなのためのおはなし会

**1 月 17 日(木)10:30～11:30**

**町田市民文学館 2F大会議室**

**プログラム**

町田ゆかりの作家紹介「高見澤潤子」 平田えり子
かんがるうのかわめくり／なにもないねこ
(別役実作) 竹本すみ子
妖精の丘が燃えている(ｱｲﾙﾗﾝﾄﾞの昔話) 山本由佳
町田のむかし **尾作一江**

無料・*直接会場へどうぞ！*

★川崎市の学校図書館と公共図書館の未来を語ろう！「知の地域づくりと図書館の役割」／講師:片山善弘氏(慶應義塾大学大学院法学研究科教授・前鳥取県知事)／1/27(日)13:30～16:30／100円／中原市民会館ホール(武蔵小杉駅下車歩5分)／住所,氏名,電話番号を記入の上 Fax で申込要／生きた学校図書館をめざす会(☎&Fax 044－969－3380 船橋)
★2007 年度児図研 全国学習会 石川学習会「子どもと本・原点から未来へ」／08/3/9(日)～10(月)／山中温泉ほくりく荘(石川県加賀市)／分科会①「石井桃子の作品・仕事」②「瀬田貞二の作品・仕事」／講演会「子どもと文学―石井桃子と瀬田貞二について」講師:松井直／ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「子ども達の読む本、読んでほしい本」―今、図書館で文庫でどう手渡すか―6000 円(1日 3000 円) 図書館見学などの OP 有〆切 1/8／問:☎ 076-223-9587 石川県立図書館子どもの本のひろば内児図研石川学習会事務局
★「かつら文庫の50年」記念の集い／3/5(水)13:00～15:30 有楽町朝日ホール／松岡享子他／3,500 円/要申込:往復はがきに氏名・住所・電話番号を明記、600 名先着順で参加票到着後払込／(財)東京子ども図書館〒165-0023 東京都中野区江原町 1-19-10

**あとがき** 町田町立図書館は建設費 280 万円の半分を住民の寄付に仰いで 1956 年に第一小学校の校庭の一隅に開館した。蔵書数 958 冊、閲覧中心で貸出をしない旧式図書館であった。町田の図書館の歴史を紐解いてみると、現在の発展は、家庭文庫から始まって、自治体に図書館の設置を義務付け充実を促し続けてきた先人の血の汗にじむ市民運動を抜きにしては考えられない。50 年を経た今、町田市民は 41 万人に膨れ上がったが、図書館登録者数はまだ 25%程度だという。図書館を活用する市民が増えれば、自治体としても成熟していくだろう。官から民へと発展の逆流を辿ろうとしている今こそ、自治体が図書館運営することの意義を歴史から学んでいきたい。良いお年を！（M⁴）